

なくそう貧困。命の水を！

# アジアネット

JAFS

NEWS & REPORTS 2017年秋

131



特集

第5回アジア・  
ユースサミット



# JAFS

since 1979  
公益社団法人アジア協会アジア友の会  
Japan Asian Association & Asian Friendship Society



## 目次

|  |       |
|--|-------|
| 「巻頭言」アジアの経済と教育に貢献                      | 02    |
| 特集=第5回アジア・ユースサミット                      |       |
| 明日の地域づくり 熱く討論                          | 04~07 |
| 参加した高校と発表テーマ                           | 08    |
| 第5回を振り返って                              | 09    |
| 海外からの報告                                |       |
| スリランカの水害被災地に笑顔                         | 10    |
| ネパールへ布ナプキンをつくって贈る                      | 11    |
| 津波の後にマングローブ育て13年                       | 12・13 |
| 自立へ歩むインドの女性                            | 14・15 |
| 井戸寄贈報告                                 | 16~19 |
| 「JAFS プラザ」=国内の活動                       | 20~25 |
| 空き缶集めてネパールに小学校/小原副会長が環境大臣表彰/ミャンマーをテーマに |       |
| ビジネス交流/食を通して異文化交流/和歌山・新宮で土と水と緑の学校 ほか   |       |
| 熊本地震から1年半                              | 26    |
| 「新・The 社会貢献」法人紹介                       | 27    |
| 新入会員紹介・領収報告                            | 28・29 |
| 「里子の笑顔」「アジアの友から」                       | 30    |
| 「環境コラム」                                | 31    |

## アジア協会アジア友の会とは

アジア18カ国に井戸を贈る国際協力団体 (NGO) です。1979年に大阪で設立。誰もが生まれてきて良かったと思える社会を目指し、井戸建設 (累計1898基) や植林 (累計250万本)、子ども教育支援を中心に活動しています。

全国都道府県認可の社団法人取得第1号団体です。2012年4月1日からは、内閣総理大臣の認定を受け、公益社団法人になりました。

海外との交流・協力活動は、インド、インドネシア、バングラデシュ、タイ、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ネパール、韓国、カンボジア、シンガポール、ミャンマー、ラオス、中国、ベトナム、モンゴル、パキスタン、アフガニスタン、さらに西アフリカのブルキナファソにも広がり、友情のネットワークが形成されています。

日本国内でも、各地でチャリティープログラム、自然環境プログラムなどを行っています。

※ホームページ <http://jafs.or.jp>

## 本会へのご寄付は、寄付金控除の対象です

JAFSは内閣府より公益社団法人としての認定を受けています。JAFSへの寄付金や会費 (社員会費は除く) は、申告によって、所得税、法人税、相続税について税制上の優遇措置 (寄付金控除) を受けることができます。

確定申告の際、税額控除、所得控除のいずれか有利な方を選択できます。本会発行の領収書を添付して申告してください。法人税は損金の額に算入することができます。相続税は最寄りの税務署などにお問い合わせください。

## 巻頭言

1999年は、弊社にとっては新しい本社ビルが竣工し、大阪証券取引所に上場した年です。一般的には上場や竣工記念の祝賀会などが行われるところ、その費用を人の役に立つことに役立てたいと考えました。色々な縁が重なって、ミャンマー第2の都市マンダレーにある、耳の聞こえない子どもたちが通う国立のろう学校 (マンダレーデフスクー

## アジアの経済と教育に貢献



立木 貞昭  
株式会社京進  
代表取締役会長

ル) に、2階建ての寄宿舎を寄付することにになりました。ミャンマーの社会福祉省の大臣や、元ミャンマー大使、大学教授など、多くの方々のご協力のもと、それ以来19年間、もう一棟の寄宿舎や職業訓練センターの建物、教室や職員室のあるメインビルディング、スクールバス、パソコンといった学習・訓練に必要な設備や機器を毎年贈り続けています。デフスクールの卒業生たちは職業訓練センターで技術を学ぶことで、自立して働き、健全な生活ができるようになってきています。さらに独立して起業する人もできています。毎年、寄付の贈呈式でデフスクールを訪れると、技術が向上していることを実感し、大変嬉しく思っています。デフスクール

の生徒たちが作ったバッグを毎年注文し、日本国内に300拠点以上ある弊社の学習塾の生徒たちにも障がい者の自立支援に貢献してもらおうという取り組みをしています。大学や日本語学校で日本語を学ぶミャンマーの子どもたちのために開催した日本語スピーチコンテストをきっかけに、弊社はヤンゴンにミャンマーの人との合弁会社を設立し、2015年に弊社10校目となる日本語学校「京進ランゲージアカデミー

## JAFSのキャッチフレーズが本年から「なくそう貧困。命の水を！」に変わりました。

## JAFS会員綱領

私たちは、世界の平和と人間の基本的人権を守るために人々との「友情と信頼」に基づく「理解と協力と連帯」の輪をアジアと世界に広げます。かかる目的をもって私たちJAFS会員は以下のことに努めます。

- 一、より人間らしい地球社会の創造をめざします。
  - 一、アジアと世界の人人々の幸せに奉仕します。
  - 一、地球の自然環境を大切に守ります。
  - 一、生活の無駄を省き、地球資源を大切にします。
  - 一、これらの奉仕活動を通して、自分と他人の生命の価値を高めます。
- 以上

## プロフィール

たつき・さだあき 1944年、京都市生まれ。69年、同志社大学卒。株式会社藤三商会(商社)入社。事業部長、子会社社長等を歴任の後、75年、学習塾「京都進学教室」を創業。81年、株式会社京都進学教室(現株式会社京進)を設立し、代表取締役理事長(社長)に就任。2009年より代表取締役会長。



## 課題を見据え、地に足をつけて

**次々とプロジェクトを発表**

8月17日、関西国際空港に近い大阪府・泉佐野市立文化会館エブノ泉の森ホールに高校生らが集いました。ユースサミットの開幕です。

最初のプログラムは「地域を良くするプロジェクト」のプレゼンテーションです。2日間にわたって、国内外の高校生が次々にマイクを握って演壇に立ち、プロジェクトを映像を交えて発表しました。上の写真。

一番手はインドの看護学校生 Rini Philip Paranjape さん。スラム地区につくった健康保健ケアセンターと食品市場を拠点に、そこに住む人々、特に女性の健康・衛生状態を改善し、差別から守り、就労を支援する取り組みを報告。「地域の人たちの話を聴いて、私たちの活動が間違っていないかどうか絶えずフィードバックを受け、さらに認識を高めた」と結びました。

日本の高校生も続きました。神戸学院大学附属高校のインターアクトクラブは、学校の近くに本社がある食品会社に協力してもらい、安全で栄養バランスが良い食事を、同学院中学の下級生たちに広めています。お弁当の写真撮ってわかりやすく視覚化し、中学生と一緒に食育の大切さを教わる様子などを紹介しました。

海外からはさらに、バングラデシュの農村で識字力を高めるため、教育プ

▲プロジェクトを発表し合う各国の参加者たち=8月17・18日、大阪府泉佐野市文化会館

## 12カ国の高校生ら 124人が参加し開催

ユースサミットには計124人が参加しました。海外は11カ国13地域から計33人（高校生13人、引率者20人）、日本は9校10地域から計43人（高校生35人、引率者8人）。実行委員（15人）、通訳、ファシリテーター、ボランティア（33人）も加わりました。

JAFSが主催する第5回アジア・ユースサミット（AYS）が8月17日～22日、大阪など関西各地で、日本を含む12カ国の高校生が参加して開かれました。「地球の未来に向かって持続可能な地域を目指して」をテーマに海外と日本で交互に毎年開いており、今回は「地域を良くするプロジェクトを創ろう!!」経済、環境、文化がいきるまちづくりを目指して」をサブテーマに掲げました。参加者が独自につくったプロジェクトを次々に発表し、グループ討論してそれらに共通する社会的背景や課題、解決方法を探り、さらにフィールド研修で過疎の村を訪ね、「地域の様々な人と交流して質の良い教育と優れた健康を実現し、雇用の不平等をなくそう」と訴える宣言文を採択しました。6日間にわたって展開された若く熱い国際交流の様相を報告します。

## 採択された宣言文 = 全文

For our sustainable society

### 1. Interaction

Interaction with community can nurture the growth of sustainability. Better interaction and collaboratin are needed to make good relationship among societies

### 2. Education

Quality education makes a better interaction that achives economic growth. We want to obtain knowledge and wisdom on what we can do to have a healthy environment and now we can take care of it

### 3. Health

Good health education can prevent lots of diseases. Essential to make a sustainable society is to have a good health and well-being physically and emotionally

### 4.Equality

We will remove inequality in employment regardless gender, race, sexuality, handicap, nationality, and so on

By achieving these, we can decrease poverty.

Pursuing such actions leads us to sustainable society

私たちの持続可能な社会を目指して

### 1.交流

地域社会の様々な人と交流をはかることで、地域の持続可能性が育まれます。社会の中で良好な結びつきをつくるためには、地域における充実した交流と協力が必要です。

### 2.教育

質の良い教育が、経済成長の達成につながる充実した交流をもたらします。私たちは、健全な環境のためになすべきことに関する知識と知恵を得、その環境を守ってゆけるよう配慮します。

### 3.健康

優れた健康・衛生教育は、多くの病気を防いでくれます。持続可能な社会づくりには、まず私たちが皆、心身ともに健康かつ幸せであることが不可欠です。

### 4.平等

私たちは、性別・人種・性的区別・障害・国籍などにかかわらず、雇用における不平等をなくします。

私たちはこれらを成し遂げることで貧困をも減らせます。このようなアクションの継続により、私たちは持続可能な社会を実現します。

グループ討論をしてまとめた宣言文が全体会議で発表され(右)、参加者全員が署名して(下)採択された。8月22日、大阪市中央区のドーンセンター



プログラムを啓発するスマートフォンアプリを開発するプロジェクトが紹介されました。スリランカからは長年の内戦で心身ともに傷ついた子どもたちの教育を支援する取り組みが、インドネシアからは津波で大被害を受けた海岸に防災用のマングローブを育てる取り組みが、それぞれ発表されました。ベトナムからは貧しい農村から Dengue 熱をなくすプロジェクト、フィリピンからはリサイクル材を活用した内職と有機野菜農業によって若者を村に引き戻そうという提案などがありました。日本国内からは、海外移住者が増え

ている街を住みやすくするために交流プログラムを実施するプロジェクト▽母子家庭の子どもの宿題を手伝い、自由時間を一緒に過ごすなどして、その問題解決の一助を担うプロジェクト▽東日本大震災の被災地を継続的に訪問して復興を応援する取り組み、などが発表されました。

どのプロジェクトも、高校生自身らが学校や自分たちが住む地域の概要や特徴、課題を、数カ月から1年以上かけて調べ、自治体や地域の人たちにもインタビューして立案しました。すでに実践中のものもあります。対象とする地域、内容が詳しくしつかりとまとめられており、参加者それぞれの熱意を感じさせました。8月に発表された各プロジェクトのタイトルと発表者の一覧表。9月の「第5回AYSを振り返って」も参照

### グループ討議し課題を確認

8月19、21両日は、会場を奈良市青少年野外活動センターに移し、合宿形式でグループ討論をしました。プレゼンテーションで発表した各プロジェクトに共通する課題と解決方法を宣言文としてまとめて採択するために、国連加盟国が2015年に提示して2030年までに実現を目指しているSDGs(持続可能な開発目標)の17目標を評価の基準に設定して話し合いました。

議論が円滑にできるように、NPO法人ソーシヤルギルドの山本佳史さんが総合ファシリテーターとなり、ガイドラインを示しました。初対面の参加者たちの緊張を解きほぐしながら、グループ内での互いの役割を認識

を目指して村が行っているさまざまな取り組みについて、講演を聴きました。村に新たに移住してきた方から話を聴き、さまざまな取り組みが行われている場所を訪ねて担当者から説明を受けました。村に流れる高見川の清流も楽しみました。その前日には、村に移住して、商業デザインターのオフィスキャンプ(移住者による村の経済活性化のためのシェアオフィス)を営む坂本大祐さんに会いました。坂本さんは、村での仕事や生活の状況、同じ移住者の仕事や村での取り組み、人とのつながりなどを詳しく話してくれました。「地域を良くするため」のさまざまな工夫が、明日を考える高校生たちのヒントになったと思います。

して尊重し合うなどといった、議論の進め方をていねいに説明しました。

グループは7つに分かれ、それぞれに大学生ファシリテーターと海外コーディネーター、通訳が入って、言葉や社会的背景が違うことから生まれる細かなズレを埋める支援をしました。宣言文をまとめるのは、とても困難な作業でした。各参加者が抱える国情や社会的背景は大きく違います。例えば「貧困」という言葉一つをとって「絶対的貧困」と「相対的貧困」の違いから説明して議論を進めなければなりません。共通の課題と解決方法を見つけられるところまで、なかなか議論が進まないのです。

終始、説明だけに多くの時間を費やすグループがありました。「子どもの教育と生活環境の改善」という共通の目標は見えていても、どうしたらそこへたどり着けるのかが分からず、議論が行き詰まることがありました。それでも高校生たちは、熱心に議論を続けました。やっと各グループがまとめを発表することができたのは、21日の正午過ぎでした。

### 過疎の村でフィールド研修

8月20日、参加者たちは、合宿所から約2時間離れた奈良県東吉野村(人口約1660人)を訪ねました。村議会と森林組合の方々から歓迎を受け、水本実村長から、過疎からの再生

### 全員が署名して宣言文採択

グループ討論の最後に、各グループからリーダーが1人ずつ選ばれ、討論の成果を宣言文にまとめました。「宣言文IIアクション・ステートメント」という耳慣れない言葉を参加者に説明するところから始め、英語、日本語が飛び交う中で、宣言に盛り込む言葉やトピックなどを選んでいきました。

8月22日最終日、大阪市中央区のドーンセンターで、こうしてまとめた宣言文が、全体会議で披露されました。各グループのリーダーたちがステージに立つて模造紙に書いた文を読み上げ、参加者全員が署名して満場一致で採択しました。6ページの写真。上に宣言文の英語原文と和訳の全文

会議の後には、高校生たちによるカルチャーパフォーマンス。インド・マハラシュトラ州の少数民族の舞踊や歌、スリランカのタミル族の伝統舞踊、カンボジアのグループダンス、タイの刀剣劇……。日本からも書道パフォーマンス、合気道、ソーラン節などが披露されました。それぞれの国の特徴が垣間見える楽しい時間でした。

最後に、発表された地域を良くするプロジェクトの中から、プレゼンテーションを聴いた人が投票で選ぶ「オーディエンス賞」と、実行委員会を選ぶ「優秀賞」が決まり、認定書が手渡されました。8月の表参照

## 高校生が発表した各プロジェクトのタイトルと発表者（登壇順）

- カンボジア Western International School**  
「プノム・チッソール寺院の美を再認識しよう」  
発表者：Rhonda Chhorng
- 関西学院高等部 2年 =優秀賞**  
「K Gマルシェプロジェクト」  
発表者：笠松胡桃、芝谷咲紀、矢川葉奈、津田理々香
- フィリピン Wesleyan University-Philippines**  
「リサイクル材を活用した内職と有機野菜農業を通じた村の社会経済開発」  
発表者：Erizelle Mangalino Padiernos
- 大阪府立松原高校 3年 子どもの居場所を作り隊**  
「楽しく、協力し合い、学ぶ教育支援」  
発表者：井本満里菜、木村冬美、米谷太一、前川美優羽、吉田朱里
- インド Rashtasant Tukdoji Maharaj Nagpur University =優秀賞**  
「養鶏による青少年の雇用と食改善」  
発表者：Ketaki Deogade
- 大阪府立北摂つばさ高校 2年**  
「気仙沼復興支援プロジェクト」  
発表者：本田彩嬉萌
- 大阪府立佐野高校 3年 チーム水なす =優秀賞**  
「Link Vegetably Love Locally」  
発表者：長尾美保、大塚麻由、立住空、竹中聡馬
- 中国 Beijing No.18 middle School**  
「ヤン・ゼンの取り残された子どもたち」  
発表者：Cheng Minyi
- 兵庫県立芦屋国際中等教育学校 第5学年**  
「神戸の中高生でつくる Gather Together Project」  
発表者：一森春乃、増尾優輝
- インドネシア Global Islamic School 2 Serpong**  
「JAK TA MEMBACA ～本を読みましよう!!～」  
発表者：Adeela Afra
- 千葉県立松戸国際高校**  
「母子の笑顔を作り隊」  
発表者：杉山和花菜、桑原恵海
- バングラデシュ Institute of Water & Flood Management, Bangladesh University of Engineering and Technology**  
「水不足が深刻なバリンド地域におけるコミュニティベースの水管理の可能性について」  
発表者：MD. Arif Chowdhury
- ※誌面スペースの制約のため、一部のタイトルを短縮・簡略化しました。

- インド VSPN看護学校**  
「社会保健ケアセンターと食料市場」  
発表者：Rini Philip Paranjape
- 神戸学院大学附属高等学校 インターアクトクラブ**  
「現代っ子の食事改善プロジェクト with フジッコ」  
発表者：瀬川奈央、阪本響生、浅野尋海
- スリランカ St. Mary's College**  
「不死鳥 灰から立ち上がれ!!」  
発表者：Sapthiha Priyatharshini Jeevaraj
- バングラデシュ European Grammar School**  
「識字教育プログラムを立ち上げるためのデータベースが構築されているアプリの開発」  
発表者：Chowdhury Kamrul Huda
- インドネシア Syiah Kuala University =オーディエンス賞**  
「証明しよう（このグループにのって、マングローブを植えよう!）」  
発表者：Wyona Allysha Rustandi Putri
- 大阪府立佐野高校 1年8組 =オーディエンス賞**  
「いまどき高校生が集うカフェ! In 商店街」  
発表者：中川愛菜、横田藍子、歳弘爽由花、林彩子、雪本大賢
- タイ Sam Sung Pittayakhom School**  
「浅瀬にいる魚の階段づくり」  
発表者：Gosubin Thasa
- パキスタン Global College of Sciences =優秀賞**  
「低所得層の女性たちの実業家育成プログラムを創ろう!」  
発表者：Haider Ali Khan
- 大阪府立春日丘高校 2年**  
「北摂再発見プロジェクト」  
発表者：田嶋巳紗、油谷凜、伊東葵、内田遙香
- ネパール Nightingale International Higher Secondary School**  
「健康生活のためのクリーンな環境づくり」  
発表者：Mr. Bikesh Tandukar
- 大阪府立三島高校**  
「外国人と共生できる街づくり」  
発表者：酒元恵美、大津雪音、甲斐梨沙子、柳生花歌、西川真恵、村尾すず、形部里帆
- ベトナム University of Medicine and Pharmacy, Ho Chi Minh City**  
「気候変動に適応した Dengue 熱の抑制方法」  
発表者：Nguyen Truong Thanh Nguyen

## 第5回AYSを振り返って

### 未来に輝く若者たちに期待する

実行委員長 大倉達也

暖かき太陽のもと青葉がすくすくと成長するように、高校生たちはプレゼンテーション、議論を真剣に行い、すべてのプログラムを終え、目をキラキラさせて帰国の途につきました。6日間の合宿を過ごして一まわり二まわり成長しました。地区のリーダーたれ、そして国際感覚を持つ人間になってほしいと祈りつつ後姿を見送りました。

プレゼンテーションのテーマは、アジア諸国は津波、伝染病対策、水問題など生死につながる大きく深刻な問題や、ごみ対策、女性の社会地位の向上などでした。日本からは、名産品を使った地区活性化提案が多く、都市農業、食育、子どもの貧困対策など隠れた問題への鋭い提案もありました。フィールドワークの重要性について実行委員会は、過去の経験から十分に理解しているので、準備に相当時間を使いました。日本で大きな問題になっている限界集落にならないように様々な対策を講じている奈良県東吉野村のご協力をいただき、全員で1日訪問して施策などを見聞しました。形こそ違

え、経済成長で都市集中が激しいアジア各地の働き盛りの世代は都市へ、老人と子どもは村に取り残される現象が起きつつあります。人口が減っている少数民族の集落があると思います。受賞者たちは自分たちの提案を帰国後も続け、発展させた内容をJAFFS

### 課題しつかり捉えた高校生たち

プログラム委員 柏木道子

今回のAYSは前回に引き続き、「地域をよくするプロジェクトを創ろう!」経済、環境、文化がいきるまちづくりを目指して」をサブテーマにしました。独自性 (Originality)、実現可能性 (Feasibility)、持続性 (Sustainability) があることを、実行委員会は参加者に求めました。アジア11カ国と日本の9高校が発表した計24のプロジェクトはどれも、この趣旨をしつかり捉えていました。地域の課題を高校生の視点で取り上げ、そのテーマを選んだ背景や目標、ゴールを明確に示していたと思います。

へ報告することになっています。大いに期待しています。グループ討論とアクションプランの詰めは、国連のSDGs (持続可能な開発目標) 17項目を評価基準としました。多様な提案があった中で有効に機能したと思います。

この事業は平成29年度外務省NGO事業補助金、国際交流基金地域リーダー・若者交流助成プログラム、三菱UFJ国際財団国際交流事業助成を受けており、多くの皆様とJAFFS会員のボランティア活動に支えられています。感謝申し上げます。

日本の高校生たちのプロジェクトは、発展途上にあるアジア諸国の問題意識と比べ、グローバルな視点や独創性にやや欠けるように思われましたが、高校生なりの視点で取り組んだ面白い発表がありました。

グループ討論では参加者が、各プロジェクトの共通性を求めながら、国連のSDGsにも着目し、環境・経済・文化・教育などについて討論し、アクションプランへとつなげました。興味深かったプロジェクトを3つ紹介します。いずれも閉会式で優秀賞を受賞しました。

**パキスタン・Mr. Haider Ali Khan**  
「低所得層の女性たちの実業家育成プ

「プログラムを創ろう!」女性が家事以外に仕事をして家計を助け、職業を持つて自立して生きることが、多くのアジアの国では共通して困難です。すでにあるカフェで低所得者層の女性が働き、しかも富裕層の婦人や子どももそこに集まって交流を可能にするプロジェクト。ムスレムが多い地域で男性が提唱しているところが画期的です。

**インド・Ms. Ketaki Deogade** 「養鶏による青少年の雇用と食改善」 高等教育を受ける機会も仕事も少ない少数民族の青少年に、養鶏をビジネスとして雇用を生み出し、卵と鶏肉を売って利益を得、卵と鶏肉を食べて地域住民の栄養を改善しようとしています。その利益はさらに多くの養鶏へと展開し、鶏舎の下で魚を飼って食材とするなど良い循環。養鶏→雇用の創出→青少年の生きがい創出→栄養補給→健康福祉の改善……を目指すものでした。

**佐野高校・チーム水なす** 「野菜栽培を通して地域福祉に奉仕する」 地元(泉佐野市)野菜として有名な水なすの栽培に、孤立しやすい高齢者や引きこもりの若者の参加を促します。社会参加の少ない地域の人々へ働きかけを通して交流を深め愛を育む。家庭や空き地で栽培して収穫した水なすを共に食する場でも人々の絆を深め、良い福祉の循環を形成しています。メンバーに水なす栽培のエキスパートがいて、彼を中心に続けていくとのことでした。



支援物資の学用品セットに大喜びの子どもたち＝5月、スリランカ・ラトナプラ

## スリランカの水害地に皆さまのご支援で笑顔

5月17日、降り続いた雨によって、スリランカ南西部に多くの被害が発生しました。ゴール(地図の水色)、コロンボ(同オレンジ)、カルターラ(同緑)各地区の土地の低い地域が洪水に見舞われ、ラトナプラ(同ピンク)、マータラ(同赤)両地区で多くの人がけがが起り、死者212名、負傷147名、行方不明79名、そして17万5660世帯が被災しました。従前より繰り返される水害に対応するため、本会提携団体のサルボダヤでは災害対策部ができており、災害直後の救援と緊急事態対策の体制が組まれています。今回は、孤立した人々の避難をポートで補助し、水・食料・薬品の配布などを迅速に開始しました。サルボダヤ内のグループであるシャンティ・セナは若者たちで構成されており、通常は平和構築と地域開発での若



者リーダー育成が主な活動です。今回は、炊き出しや井戸洗浄、救援キャンプ運営、学校支援を担当しています。現地調査によると、上記地域では、子どもたちが制服や学用品を失い、学校が再開されたにも関わらず通えないでいました。そこでJAFSはこのシャンティ・セナと連携し、皆様からのご支援をもとに、子ども一人当たりリュックサック1、練習帳12、筆箱1、鉛筆4、ボールペン1、鉛筆削り1、ランチボックス1、水筒1、スクールシューズ1、をセットにして配布することができました。おかげで、現地から感謝を込めて手紙と写真が送られてきました。ご支援ありがとうございました。(サルボダヤ副代表 ラビンドラ・カランダゲさんの報告をもとに、編集部追記)

**新たなAFS部会**  
スリランカに新たに、アジア友の会スリランカ部会「AFS・スリランカ」が誕生しました。またインド・カルナータカ州ベングールには、「AFS・ベングール」が誕生しました。現地との連携がますます進む予定です。

## 布ナプキンをつくって贈る

### ネパール女性と日本女性のきずな

「あなたは生理の時、どう対処しているの?」。ネパールの農村でお世話になっていた家族のお姉さんから聞かれました。今から25年前のことです。正直、この当時の私にはこの質問の意図がすぐにわかりませんでした。お姉さんたちの対処方法を聞くと、なんと苦勞をされていること。そのとき初めて、女性たちは表に出にくいところにも自分で創意工夫をして乗り越えている事情を知りました。

「私たちも、もう少し安心して過ごせるものが欲しいわ」との言葉が印象に残り、何とかしてあげたい、との思いだけを持ちつつ具体的な行動を起こせないうま四半世紀。そんな中、昨年末、ネパールで偶然に「布ナプキンを女性に広めたい」との思いを持った日本女性との出会いに恵まれ、ようやく女性たちの苦勞を改善できるきっかけをいただきました。

でも、布ナプキンの良さを知ってもらうには、まず使って体感してもらわなければならない。つくるにもかなりの数を準備しなければなりません。このプロジェクトを日本で数人の女性会員に話すと、うれしいことに、すぐに協



日本から贈られた手づくり布ナプキン(巾着袋入り)写真下)を手にして、笑顔のネパールの女子高校生たち＝8月、ネパール・ボテシパ村

力を始めてくれ、これまでに約700枚をネパールの女性たちに配ることができました。今は現地に適した形状や布の性質を、アンケート調査をして探

使いやすく、特にコットン生地が使用に適切です(ウルミラさん18歳)「もっと大きなものが欲しい。小さいものは、位置が変わってしまうことを

ついています。中学高学年や高校生からの意見をいくつか紹介します。

「大変心地が良いです。最初あまり信用していなかったのですが、服に赤い染みがついてしまわないかと恐ろしく使っていました。その心配なく快適です。厚くて長い形はとても

不快に感じ、使いにくいです」(ブラスマさん16歳)「簡単に心地良い。不快に感じることなく歩き、遊べるようになりました。やわらかい布のナプキンがもっと欲しいです」(バグワティさん15歳)彼女たちがこれからも学校生活に不安を感じないで過ごすことができるように改善し、最終的には自分たちでつくれるようになることを目指しています。加えて、ハンドブックをつくる予定です。国が変わっても、同じ女性として思いは一緒です。女性だからこそ理解してサポートできること、そのつながりを大切にネパールの女性に広めていきたいです。

日本でこのプロジェクトをサポートしてくださるJAFS会員、吉田幸子さんからのメッセージです。「ネパールの女性たちが生理時にも学校に通え、快適に過ごせるようにと願ってJAFSで『布ナプキンを作った贈る活動』が始まったことを知りました。主婦が自宅で自分のペースに合わせてできる、と参加しています。長く続けられるといいなと思っています。可愛い布とお仲間を募集中!」他にサポートしてくださっているのは、近藤朋子さん、平原榮子さん、加芝ナミ子さん、天野澄子さん、吉田暢子さん、大塩節子さん、作業所「あすなろ」母の会、の皆さんです。(JAFSスタッフ 熱田典子)

# マングローブ育て13年 アチェの津波災害その後

AFSアチェ(インドネシア) マクサルミナ・ワハブ

約13年前、インドネシアではじめて、恐らく歴史上で最も深い衝撃を受けたスマトラ島半島部を襲った津波の追悼式があり、JAFSとアチェの人々との絆ができました。数名のJAFSメンバーは、地元の人々といっしょに式典に参加し、バンダアチェとアチェプサル周辺の3か所に、新しく育ったマングローブの苗を植えましました。これらの苗は、種をビディーから持ち込み、植樹地域近隣で2か月間しっかりと育てられたものです。

ほんのわずかです。しかし、何年かたち、いつか、次の世代の人たちが以前海岸を覆っていたマングローブの林を再び見ることができるよう、大地を緑で満たすためにしなければならぬ最初の一步です。

## 津波災害の後に植樹して成長途上のマングローブ=インドネシア、スマトラ島バンダアチェ沿岸

ついかは育ち続けて新しく種を蒔きどこかへ流れ着いています。皆とは言いませんが、マングローブの正しい植え方がわかっていなくても、報道されただけ

に植える人たちがいたりしました。結果として、マングローブがその後どうなったかは気にかけませんでした。調査のために私はこの海岸沿い周辺を車で回りましたが、異なる場所で見られる高さのマングローブの木々を見ることはできませんでした。新しく植えられた種々は新しい小さな森へと成長し、数千を超えるマングローブが、植樹の準備を整え並んでいます。我々が13年前に植えたマングローブはそれらの周りで雄大にたたずんでいます。真昼なのに、マングローブの陰に隠れていると涼しく感じる事ができ、厚い葉っぱの下からは鳥たちの鳴き声を聞くことができます。私は、この数年間のうちにこんな光景を目にできるとは夢にも思いませんでした。

しかしながら、豊かな生物多様性をよみがえらすには、まだ長い年月を要します。新しい種がすぐにダメになつてしまわないように惜しみない努力が必要です。場所の選定から植樹後のフォローアップまで、マングローブの成長を左右します。また、現在行っている現地の人々へのマングローブに関する教育プログラムを止めるわけにはいきません。マングローブを植える時に直面する問題は、自然からだけでは

なく、マングローブの生息区域に住まう人々からも起こります。NGOまたはドナーは植樹後にその地を離れてしまいがちですが、現地の人々はいつまでもその地域にいます。もし、彼らがマングローブの重要性を理解できれば、年月が経ち、マングローブが成長したときに恩恵を受けることができ、彼らは進んでボランティアとしてマングローブの世話をしてくれるでしょう。

次の重要なステップは、マングローブがいかに重要なかを、地域に住む人々、とりわけ次の世代にしっかりと認識してもらうことです。また、この教育は植樹活動に伴われることが必要です。オランダ統治時代、オランダの方々によりたくさんのマングローブがアチェの海岸沿いに植えられました。ですが、知識が不足していたため、一部の人々はそれらを伐採して住居を建ててしまいました。

津波被害を生き抜いたお年寄り世代は、アチェの海岸沿いにたくさんマングローブの緑が生い茂っていたことを思い出すことでしょう。残念ながら、海岸沿いが同じ状態に戻るまで、彼らは長く生きてはいけません。元の状態に戻るまでには長い年月を要します。願わくば次の世代が再び生い茂るマングローブを見ることができま

(翻訳) カンボジア王国名誉領事館 館長 木下峻佑



## Mangrove Growth 13 Years After TSUNAMI in ACEH

Almost thirteen years ago during the first and maybe the most deeply felt commemoration of tsunami that struck the jutland of Sumatra Island, JAFS tied a relationship with Aceh people. On that day several members of JAFS blended with the locals to attend the ceremony and also putting the newly grown magrove trees in three locations around Banda Aceh and Aceh Besar. The seeds was brought from Pidie and well nurtured for two months near the planting locations. Compared to the total size of the devastated coast line area, the width of place where we planted mangroove is almost unnoticable. But we know the first step has to be taken, the soil need to be filled with little green before someday and many years ahead and generations to come will be able to see the mangrove forest again that once surrounded the beach

Many other NGOs and groups also taking the same action. As everyone know how important it is to build a green buffer zone to reduce future impact of disaster and bring back the dissapeared ecosystem. Millions of mangrove have been planted in all over Aceh. Some might died early and some might keep growing and release new seeds in the water to be swept somewhere else. Not everyone actually really know how to plant it properly or some might just did to get media coverage, after that they never really care what happened to those mangroves.

As I drive along the coast to do a little survey, I saw many different height of mangrove trees on different locations. From the newly planted seed to those who have turned into a little forest. There are also place where they do nursery for mangrove seeds. There are thousands of them lining up ready to be planted. Those that we planted thirteen years ago are

among those who tower high and stand majestically. Although in the midday I can feel the coolness under the shade magrove and hear birds chirping behind the thick leaves. I would never have thought to witness this scenery many many years ago.

However there are still a long way to go to bring back the green filled with rich biodiversity. Many efforts has to be taken to make sure the new seed will not perish in short time. From selecting location to the follow up activity after plantation will contribute to the success of magrove growth. Also the ongoing education to educate the locals about magrove can not be dismissed. The challenge faced when planting magrove do not only come merely from the nature itself but also from human who live near the habitat. The NGO or donors will leave after the plantation but the local will always be there. If they understand well the important of mangrove and benefit they could reap as time goes by, they will voluntarily taking a good care of mangrove.

The next important step is to make sure everybody aware and understand of how important mangrove is. Especially to the next generation. Education must come along with plantation activity. During Dutch colonialism, Dutch planted many mangrove along the coast of Aceh. Due to lack of knowledge, some people cut it down to build residential areas. Older generations who survived tsunami could recall the past when the coast along Aceh was so green with mangrove forest but they might not live long enough to see those magrove forest return again. It will take many years, but hopefully next generation will be able to see it again.



# 自立へ歩むインドの女性

## 貧しさ・カースト制…壁と向き合い

支援プロジェクトの現場を訪ねて

2016年度インターン  
田中 祥子

JAFS事務局で3月までインターンを務めた田中祥子さんが2月から3月にかけて、インド中部マハラシュトラ州にある、JAFSと現地提携団体RUDYAのプロジェクト地をRUDYA代表カシナート氏と訪れ、女性の自立を支援する取り組みを取材しました。また、現地提携団体SPARSH代表のバルサガデ氏とも、JAFS・SPARSHプロジェクト地などいくつかの村を視察したので報告します。

### 共同事業で女性が収入

JAFS・RUDYAプロジェクト地のガッチロリ県マハラ村。初めて村に来る外国人である私を見て、村人は困惑しているようでした。カシナート氏が何回も足を運んで彼らと信頼関係を築いてきたからこそ、外国人の私



村の女性たちは夫の収入のみに頼らず、自分でも家計を支える存在になることで自信をつけた。中央の赤いTシャツの人が筆者。インド・マハラシュトラ州ガッチロリ県ポリー村

でも村に行けるのだと理解しました。村では女性の月経を不浄・タブーとみなす風潮があります。月経中の女性は、村の奥の目につかない場所にある「ガオコール」と呼ばれる薄暗い小屋で過ごさなければなりません。中に入ると、村の中にある他の家と至って変わらない様式でした。

村の青年がガオコールを肯定するのを聞き、昔からの村の風習・文化は変えられないのだと思いました。「生活全ては変えられないが、+αを取り入れることはできる」とカシナート氏は言いました。ガオコールに本を置いて月経中でも教養に触れられるよう、現地のNGOが工夫していることを知れたのは目から鱗のアイデアでした。村では女性自助グループが活動し、月1回の村の集まりが、銀行を活用する知識を得たり、家庭の問題などを共有できる場にもなっています。

女性たちは、村でとれたミルクを共同で売っています。それだけではまだ売したりと、事業内容は多岐にわたります。資金は政府の助成金に頼り切りなので、自分たちのマーケティング力と村からマビーム事務所への交通の便が悪いと問題点を指摘していました。

### カギを握る男性の理解

スタッフには男性も少数いることに気付いたので、「なぜこの仕事をしているの」と尋ねると、「インドではDVが横行しているので問題解決に携わりたかった」、「女性にも社会的平等が必要だと思った」などの回答。女性が虐げられがちな社会構造であるという問題は、男性も認識していることを感じました。さらに「男性へのカウンセリングやトレーニングも必要では？」と問うと、「家族・夫婦間の問題解決やカウンセリングをするセンターはあるが、男性だけが対象のものはない。当事者である夫婦同士での問題解決は難しく、刑事事件となるケースもある」という答えが返ってきました。

インドの現場で感じたのは、女性がいつも支援を受ける側にあることです。確かに女性が経済的に自立できる仕組みづくりも工夫されています。しかし、女性の負担や立場を理解できる男性が周りにいて、男女間の不平等を解消する社会的仕組みを構築していかないと、女性だけがいつまでも頑張らざるを得ず、自立支援は根本的には成功しないと強く感じました。

テムづくりを目指しています。

### 生理ナプキンどう導入

バルサガデ氏とは、JAFS・SPARSHプロジェクト地のシタトラ村を訪ねました。マハラ村と同様、村の入り組んだ奥の方にガオコールがあり、薄暗い小屋の中で月経中の女性が一人、食事中でした。女性自助グループのリーダーの説明では、その女性は生理用ナプキンを買いたいのが経済的余裕はなく、娘にだけでもと思いナプキンを買ったものの、使い方が分からないとのことでした。

SPARSHは一般に売られている使い捨て生理用ナプキンのほかに、洗って繰り返し使う布ナプキンの導入を進めています。その女性も使い捨てナプキンを使いたがりません。

ごみ問題や環境保全の観点からもインドでは導入を急ぐことを薦め、環境にやさしく日本の高性能な布ナプキンの一例をバルサガデ氏に紹介したところ、布ナプキンにかかる費用面を気にしていました。同時に資金不足はSPARSHの課題でもあると話していたので、布ナプキンにかかる費用を最小限にすることで導入によりつながりやすくなりました。

ガオコールの建設はこれまで、女性たちの役割でした。以前はガオコールの話題を出すこと自体がタブー視されていたのですが、最近になって男性も建

収入は十分でなく、マッシュルーム栽培が次のビジネスアイデアです。

同じプロジェクトの地である同県ポリー村のアーシシュ信用金庫は、農村の経済発展を目指しています。村で育ったカシナート氏が運営し、「村人が何を求め、何が問題で、何が足りないのか」を把握しています。信金立ち上げに必要な人材も、彼のビジネスは銀行より信頼できる、と言ってすぐ集まってくれました。

雇用機会が少ない農村で収入を得るには、自分でビジネスを立ち上げなければなりません。この信金でローンを組んで車を購入し、タクシードライバーになった村人もいます。

現地の人々のニーズや問題点を把握してフォローアップできる存在が必要だと再認識しました。NGOに常にあるのは、村人に慕われるカシナート氏の人格があつてこそです。

一方でローンの資金をJAFSからの支援金に頼り切っていることは途上国の現地提携NGOにありがちであり、かつ問題点だと感じました。

ポリー村には女性自助グループもあります。教育費などを信金から低利子で貸し付けてもらううち、自らビジネスを手掛けたと考えるようになりました。女性が収入を得て家計を支えることで家族から敬意を払われ、夫の収入だけに頼らなくても自立できるシス



## 生活の安定と向上を期待

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

村の生活用水は、1,000m離れたため池の水を利用しています。水くみは重労働のため水を買いますが、90%が約300円もしますし、家畜が糞尿をする場所の水で衛生的ではありません。村のヘン・クロンさん(28)は3人の子持ちで、水が原因で1人でも病気になると精神的、経済的にダメージを受けます。経済発展に伴い村から多くの若者が高校を中退して都会へ出稼ぎに行くため村は空洞化しています。寄贈井戸により生活基盤が安定し、生活が向上することを期待しています。



タケオ州トリアン郡ソーチャン村  
 受益者：59名(14世帯)  
 井戸形式：露天式井戸(深さ32m)

【寄贈者】京都暁星高等学校様



ソルソゴン州マトノグ町パグリラン村  
 受益者：1,000名(250世帯) 井戸の形式：ポンプ式井戸

## 長年の夢がかなった

京都暁星高校が2014年からマングローブ植林をしている村で、村人から飲料水の改善を求められていました。真水が得られる湧水地は1カ所だけで海岸に近い場所なので、満潮時には塩分が混ざり健康被害が起きていました。コンクリート製のタンクを作って湧水をためる必要があるのですが、村人の7割が貧困層で資金的に断念していました。政府へ働きかけても、大統領が変わるたびに申請し直さなければならず諦めていました。このたびのご支援により、長年の夢がかないました。

【寄贈者】京都暁星高等学校様



ヌエバエシハ州カピアオ町サンタ・イサベル小学校  
 受益者：生徒247名、教職員18名  
 井戸の形式：ポンプ式井戸(深さ30m)

## トイレの後に手を洗える

村人の大半は稲作に従事していますが、農業だけでは生活できず、家畜を育てたり、首都マニラに出稼ぎに行く貧しい村です。人口増加により、今まで1基あった井戸に人が集中し、水くみに時間がかかり、多くの問題を抱えて解決されずにいました。ご寄贈によってサンタ・イサベル小学校に初めて井戸ができ、子どもへの衛生教育や生活改善に大きく貢献しています。これまでトイレの後に手を洗う水もなく、先生は病気を心配していましたが、その心配もなくなりました。

ご寄付には  
 税の優遇措置が  
 受けられます

## なくそう貧困。命の水を!

井戸の寄贈にご協力ください。あなたの力がアジアの人々の命を助けます。ご寄贈者に完成報告書、写真、パネル写真を届け、現地の井戸に、ご寄贈者のネームプレートを設置します。

■井戸1基の建設に必要な費用■ (地域によって異なります)  
 インド=55万円 フィリピン=30万円 カンボジア=25万円  
 ミャンマー=20万円 スリランカ=20万円  
 ネパール=15万円 (パイプライン=25~150万円)  
 バングラデシュ=浅井戸20万円、深井戸50万円

※5年間のメンテナンス費、現地管理費を含む概算です

・三菱東京UFJ銀行 大阪中央支店 普通 1968711  
 公益社団法人アジア協会アジア友の会  
 ・郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

■お振込み先■

詳しくはアジア協会アジア友の会  
 06-6444-0587へ

安全で衛生的な水を確保できないアジアの地域に井戸ができて生活基盤が整い、自立へ一歩踏み出せるようになりました。ご寄贈くださったみなさまに感謝申し上げます。

# みなさんのおかげで 井戸ができた村

【寄贈者】JAFSネパールのかけ橋様



バグワティ県シンドウパルチョーク郡ボテシパ村  
 受益者：150名(35世帯) 井戸形式：水道式パイプライン

## 地震による水不足が解消

標高1,000mを超える山頂にあり、開発の遅れた村です。地震で大きな被害を受け、村人は自分で建てた仮設小屋で暮らしています。地震前は水に恵まれた土地でしたが、地震後は水源が変わり、生活用水も不足するようになりました。水不足で野菜を栽培できず、体調を崩す人が増え、井戸を求める声が高まってきましたが、自力で井戸をつくる資金力がありませんでした。水道型水場ができ、取水制限はありませんが、安心な水を得ることができます。村人は心より感謝しています。

## 生活と命の不安が消えた

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

若者は首都プノンベンへの建設業や縫製工場などへ出稼ぎに行きます。村には高齢者と子どもが残ることになり、日常必要な水の確保は高齢者が担います。1,000m離れたため池への水くみは過酷なため生活用水を買っており、家計に響いていました。ため池の水も家畜が糞尿をする場所にくむので、衛生的に問題があり、水による病気が家族にとって、精神的にも経済的にも大きな負担になっていました。このたびの井戸寄贈で、生活と命の不安が取り除かれます。感謝申し上げます。



タケオ州トリアン郡ソーチャン村  
 受益者：37名(7世帯)  
 井戸形式：露天式井戸(深さ31m)

## 井戸の維持管理で永続利用を

村には穴を掘っただけの井戸がありましたが、雨季には土砂や汚水が流れ込み、乾季には枯れて使えないので、1.5km離れた井戸まで行っていました。水くみのため子どもは学校へ行けず、女性も他の仕事ができませんでした。寄贈井戸のおかげで子どもは勉強でき、女性も生活に役立つ仕事ができるようになりました。井戸建設の際は住民と行政職員が協力し、交流を通して信頼関係が生まれました。この井戸を長く利用できるように管理委員会をつくり、維持していきます。



ウバ州バドゥラ県イルクタナ村  
受益者：165名(30世帯)  
井戸の形式：露天式井戸(深さ6㍎)

【寄贈者】NITTOグループ様

【寄贈者】西宮市立甲陵中学校様

## 貧しさから抜け出す第一歩

ヌエバエシハ州サンレオナルド町タンボア  
ドラブル村 受益者：82名(15世帯)  
井戸の形式：ポンプ式井戸(深さ30㍎)



寄贈井戸のおかげで15世帯の家族が清潔な水を得ることができました。井戸ができる前は400m離れた井戸まで毎日水くみに行っていました。時間がかかるので、忙しいときは近くの川の水を利用していましたが、不衛生で病気の原因になっていました。村には井戸がありますが、この15世帯が住むところにはなく、このたびの支援のおかげで、やっと井戸ができました。貧しさから抜け出すためには、健康が第一です。井戸のおかげでその第一歩が踏み出せます。

## 安全な水で生活の生産性上がる

家から300m離れた井戸まで毎日、水くみに行っていました。みな水くみに行くため時間がかかって他の仕事ができず、トイレには不衛生なため池の水を使うため、感染症を心配しなければなりません。小さな村なので、窮状を自治体や政府に訴えても、聞き入れてもらえませんでした。KALIP I財団と日本からのご支援により、やっと井戸ができました。健康が得られて生活の生産性も高くなり、生活改善や村の発展を望むことができます。ありがとうございました。



ヌエバエシハ州カピアオ町カプット村  
受益者：55名(10世帯)  
井戸の形式：ポンプ式井戸(深さ30㍎)

【寄贈者】西宮市立甲陵中学校様

## 下痢の心配ない生活

貧しい村で多くは自給農業。現金収入は家畜を育てるか農閑期の出稼ぎに頼っており、井戸を作るだけの資金がありませんでした。井戸ができるまで3kmも離れたため池を利用し、高齢者や女性や子どもにとって水くみは重労働のため、水を買っていました。ため池の水も買う水も、動物が糞尿をする池の水では病気になります。高齢者は煮沸して利用しますが、子どもたちにはそのような習慣がなく、下痢など病気にかかっていた。寄贈井戸のおかげで健康的な生活ができます。

【寄贈者】大安中学校テクニカルボランティア部様



タケオ州ドーンケオ郡トラパインサラ村 受益者：49名(10世帯)  
井戸の形式：露天式井戸(深さ28㍎)

【寄贈者】天理教明城大教会様

## 健康的な生活で村も発展



タケオ州トレアン郡トラパン・チュレイ村  
受益者：50名(9世帯) 井戸の形式：露天式井戸(深さ18㍎)

自給農業のため現金収入が乏しく、農閑期には高齢者や子どもを残して都会へ出稼ぎに出ます。井戸が出来る前は1,200m離れたため池を生活用水に使っていましたが、子ども達は煮沸せずに飲みしばしば病気にかかっていた。子だくさんの家では誰かが病気になると精神的・経済的に負担になります。若者が出稼ぎのため高校を中退して離村すれば、村が疲弊します。この度の寄贈井戸によって生活基盤が確立し、教育支援もできます。村の発展につながります。

## 村人の健康と生活が改善

村には1基の露天式井戸がありますが、岩盤のため6m以上掘ることができません。雨季には雨水がたまって不衛生で、病気が多発していました。長年、自治体に井戸建設を要請しましたが実現せず、このたび、村の女性グループがRUDYAに相談し、日本からの協力によってようやく実現しました。約60mの深さの井戸は経費もかかり、資金は村民が拠出できる額ではありません。井戸の完成によって村人の健康と生活が改善され、病院にかかる機会も減り経済的にゆとりが生まれます。



マハラシュトラ州ガッチロリ県バンドハルサーラ村 受益者：550名(120世帯)  
井戸形式：ポンプ式井戸(深さ60㍎)

【寄贈者】NITTOグループ様



国内外の様々なイベントをHPに載せています。記事についてのお問い合わせはJAFSへ。  
＝裏表紙にアドレス、連絡先

## 地域に空き缶集めの輪広め ネパールに小学校が建った



JAFS富田地区の沖田弘子さんは、1991年に第2回JAFS国際ネットワークセミナーでネパールを訪れ、「こんなに貧しい国があるのか！」と衝撃を受けました。裸足の子どもたちを見て、はじめはゴム草履を贈ろうかと思いましたが、草履はすり減つたらおしまいで、1回だけの支援になってしまいます。学校ならその地区ですつと子供たちの役に立つので、学校のない地区に校舎を建てようと考えました。

主婦である自分ひとりでは限られていて、とても継続的な支援はできません。そこで継続して資金を集めるために、捨てられている空き缶を集めることにしました。

当時は、空き缶収集日に地区で集められている空き缶を持ち帰ることは禁じられていませんでしたので、収集場所から自転車で振り分け荷物にして自宅に持ち帰りました。軽トラック1杯分になると業者に持ち込み、3000円がもらえました。最近ではアルミの値段が値上がりしているので、1万円くらいで買ってもらえるそうです。

夫でJAFS理事の文明さんは、最

初はあまり賛成ではありませんでしたが、今では最大の協力者です。ある時「関電労組も学校建設の支援をしている。半々で学校を建てないか」とJAFSの村上事務局長から話があり、94年にネパールのピトリ村に関電労組と共同で5教室の小学校「写真上」を建てました。100万円建てたのです。これが初めての校舎建設でした。以後は共同ではなく、富田地区だけで校舎を建設しています。

ある時期から、収集場所から空き缶を持ち帰ることが禁じられたため、自宅横に空き缶収集拠点を設けました。同下右。近隣から市役所にクレームが寄せられ、市から注意されたことがありましたが、「ネパールの学校建設の費用に集めるために集めている」と事情を説明したところ、了解されました。

空き缶置き場には、「空き缶の収益で校舎ができた」という報告を張っています。地域住民の中からも支援者が徐々に増えてきました。中には定期的に早朝そつと、大きな袋いっぱい空き缶を置いていく人もいます。

空き缶の収益だけではなく、定期的にバザーも開いたり同下左、手芸品のクラフトフェアに参加したり、寄付金をいただいたりして活動資金を貯めています。昨年度は約37万円が貯まりました。

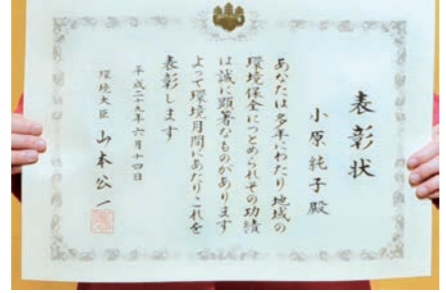
今までに4校を建設しました。1回



目は100万円です。5教室、2回目は150万円です。3教室、3回目は150万円です。4回目は、ネパール大地震で被災した地区に2015年に建てた学校です。「アジアネット」124号11ページで報じられました。

弘子さんは「この活動をしていて一番うれしいのは、共鳴して支援者になってくださる人に出会うことです。これからも長く活動を続けていきたいと思っています」と話されました。  
(インタビュ  
編集スタッフ 大本和子)

## 小原純子副会長が 環境大臣から表彰



JAFSの小原純子副会長が、環境省による平成29年度「地域環境保全功労者」に選ばれ、6月14日、環境大臣から表彰を受けました。写真。

受賞理由は、「なにわエコ会議副会長、NPO法人大阪府環境会議理事長等を歴任し、市民、NGO/NPO、行政等と一体となって温暖化防止をはじめ様々な環境保全・環境創造活動に取り組んだ」多年にわたる功績です。当会においても様々な環境保全活動に取り組んできました。一例として「おかあさんの地球学校」を1985年から開催し、家庭での日々の行い

評価いただけたことを大変うれしく思います。今後もみなさまとともに、持続可能な社会の実現に向けてますます精力的に活動していきたいと思っております」と語っています。

環境省は毎年6月の環境月間にあわせて、環境大臣による表彰を行っています。今年度は「地域環境保全功労者」に全国で57件(24名・33団体)が選ばれました。このほかに「環境保全功労者」5件(4名・1団体)、「地域環境美化功労者」54件(14名・40団体)が表彰されました。  
(JAFSスタッフ 川本裕子)

## ミャンマーをテーマにビジネス交流



ルジャパン」の砂田代表からは、サッカーを通じてミャンマーとの交流が深まったお話を、ミャンマーの歴史、見所などが紹介されました。

現在、ミャンマーで塾経営ビジネスを展開している株式会社京進の藤井さんからは、国際人材のチャンネルづくりの提案がなされました。特にアジアの国々で日本語を教える塾を展開されており、将来日本で活躍して母国との懸け橋になつていくアジアの人材を求める日本側の社会的課題に対し、しっかりと基準点を設定されている気がしました。

後半の交流会「写真上」では、名刺交換から始まり、ミャンマーでの事業の可能性を話したり、お互いのビジネスの接点を披露しあう和やかな雰囲気になりました。

何よりもJAFSの舞台の上で、人と人のつながりがより深まり、文化的にも経済的にも大きな社会資本の蓄積につながっていく役割を、皆様とともに形作れるような会合を展開していきたいと考えます。  
(JAFSスタッフ 柿島裕)

# イスラム教徒も安心 食を通して異文化交流



ア友の会（JAFS神戸）を立ち上げました。毎奇数月の第2土曜日に世界のゲストを迎え、食を通して異文化交流をテーマに懇談会をします。収益は全額、子どもたちへの生活支援として寄付しています。

観光で神戸に来られるJAFS会員や協力者の皆さまにも、お気軽にご参加いただけるよう、JAFS神戸は切磋琢磨して参りますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

（JAFS神戸世話人 中谷吉弘）

## 高齢者がふれあえる アフタヌーンティー

西宮アジア友の会（JAFS西宮）では今年、新たなイベントを始めました。家に閉じこもりがちな高齢者に元気に外に出て英国風に午後のお茶のひとときを楽しんでもらい、その参加費の一部でアジアに井戸を贈る国際貢献をしようという「ふれあいアフタヌーン・ティーの会」写真下です。

ピアノが備わった公共施設の部屋は



飲食禁止が多いのですが、カトリック夙川教会に部屋を使わせていただくことで実現できました。

これまで同様、外国人ゲストのスピーチと、そのお国風のお米料理を楽しむ「西宮ぞうすいの会」や、外国のゲストを招いての市民交流会「アジアン・パーティー」も行います。今回の新企画を加え、今後も地区での活動の幅を広げたいと思います。

「ふれあいアフタヌーン・ティーの会」は当面、偶数月（12月を除く）の第4土曜日午後2時から、カトリック夙川教会で開きます。

（JAFS西宮世話人 平山隆史）

## 安全な水の大切さを ボランティアで知る

6月28～30日、一般財団法人H<sub>2</sub>OサンタによるNGO・NPO紹介イベント「第6回H<sub>2</sub>OサンタNPOフェスティバル」が、大阪の阪急百貨店うめだ本店9階祝祭広場でありました。本会もスタッフほかボランティアの協力の下、来場者に向けて活動をPRしました。ここでボランティア活動をしたい岸本有加さん写真左が、感想を寄せてくれました。

◇ アジア協会の活動を紹介するボランティア



ティアに今回初めて参加させていただいて、アジアの発展途上で水資源がないために起こっている問題を一部知ることができました。

そこでは、何メートルも離れた場所にあるため池まで、水をくみに行く小さな子どもや女性たちが毎日何往復もし、それだけで1日が終わる毎日です。しかも、その水は泥水で不衛生なため、病気になるってしまいやすく、また、子どもたちが水くみに追われ、学ぶことができないという現状です。

日本では考えられないことで、想像することの方が難しいです。まずは、この現状をたくさんの方々に知ってもらうことが必要だと思いました。

アジア協会では、安全な水を確保するため、井戸を掘る支援をしていますが、水資源が整うことによって、水くみの仕事から解放され、教育が受けられます。また、病気になる子どもたちが減少します。

安全な水は、安心して過ごせる日常につながるのだと思います。そして、安全な水が飲めることは当たり前ではないんだなと改めて感じました。

今回のボランティア活動は、今ある当たり前のことに感謝し、そして世界の貧困を知る貴重な体験となりました。世界の人々が生まれて来て良かったと思える社会作りに、微力ながら今後も協力していきたいと思っています。

（JAFS会員 岸本有加）

## 日銀新大阪支店長を囲む会



日本銀行理事で今春、大阪支店長となった衛藤公洋さん写真前列左から4人目を囲む会を8月30日、大阪市天王寺区上本町近くのホテルアウイーナ内レストランカステロでしました。

JAFS法人賛助会の主催で会員の法人経営者20人余りが参加し、衛藤さんの「関西経済とアジア」に関する講話を聴いた後、楽しい交流のひとつを過ごしました。

衛藤さんは東京大学教養学部出身。昭和60年、日本銀行に入行後、本店勤務を経て、高知支店長、名古屋支店長などを歴任しました。尼崎市の出身で阪神タイガースファンでもあることから、参加者一同、とても親近感を持つ

## 熊本支援ギター・コンサート



ギター・アンサンブル「パトII」（代表.. JAFS会員 田口吉三さん）が7月17日、堺市立東文化会館フラットホールにて、第9回目となるチャリティコンサートをしました（出演者10名）。

入場者は約160名。古典、現代曲などを数多く演奏し、2度にわたりアンコールを受けるなど好評でした。

演奏の合間に、映像による熊本の復興状況報告や、ボランティア活動への呼びかけがありました。ロビーでは各地の災害支援写真展、チャリティバザー写真展などが行われ、来場者のご厚志をあわせ、支援金を得ることができました。

（JAFS高石 佐藤満昭）

ことができました。

講話は次のような趣旨でした。

「関西経済は目下、緩やかな回復から拡大に推移している。その牽引役の一つは、製造業による好調なアジア向けの輸出であり、もう一つが外国人観光客の消費の勢いが戻ってきていることだ。特に関西の訪日観光客数は大幅に増え続けており、インバウンド消費額は年間8700億円に及んでいる。

この消費はさらに幅広い産業に波及しており、それを加算すると、生産額ベースで1・4兆円の経済波及効果を生んでいる。また、外国人客の増加は、年間1900万泊（1日当たり約5万泊）の宿泊客増加を生み出し、国内の人口減少を補う役割も果たしている。

こうした現象の背景には東アジアの経済成長があるが、特にJAFSが支援している一人当たりGDPが3000ドルに満たないASEAN諸国や南アジアの国々がいずれ豊かになれば、日本や関西の経済成長にとっても有益なことは間違いないだろう」

JAFSの活動が、ひいては日本経済の発展にも寄与するという、当会にとっても励みとなる話を聴くことができました。

衛藤さんは、JAFSの活動にとっても理解と関心を持っていました。今後とも未永くご支援いただければと願っています。

（JAFSスタッフ 柿島裕）

# 台風ニモ負ケズ「寺子屋」開き たくましく学んだ子どもたち



4日間の日程を無事に終え、ひと回りたくましくなって修了証を抱く参加者たち=和歌山県新宮市

## 和歌山・新宮 第34回「土と水と緑の学校」

和歌山県新宮市で毎年夏に開いている「土と水と緑の学校」は、34回目を迎えました。今年は台風5号が近畿地方を襲ったため、当初の予定より開始を2日遅らせ、期間も2日間短縮した8月9日〜12日の4日間の日程で開校しました。

すでに100名の参加希望が集まっています。「台風接近」のニュースが入る中、どうすれば子どもたちが楽しめるか、どうすれば子どもたちが安全に実施できるのかを、関係者が急ぎよ話し合いました。期間を短くすると参加者が減ってしまうのでは、と心配する声が出ましたが、リーダーを務める学生ボランティアたちが、申込者全員に電話で事情を説明してくれました。おかげで、台風で移動できなくなった宮城県名取市からの参加者10名を除く90名全員が、参加してくれました。

次に、短縮した時間の中でどのようなプログラムを組むかが大きな問題となりました。学校は5つの授業から成り、それぞれを「寺子屋」と呼んでいます。全員が5つの寺子屋に参加できるように予定されていました。どの授業も大切な学びの場であり、欠かすことはできません。講師を務める地元の高野秀二さんが他の講師方の予定を調整してくださり、短縮日程でも何とか全員が5つのうち4つの寺子屋に参加できるプログラムが完成しました。初日の「心の授業」で参加者たち

は、地球全体の環境やアジアの現状について学びました。同じ年頃の子どもが自分たちとまったく違う生活を送っていることに驚き、日本の環境・生活を改めて見直しました。

高田川では、「水の授業」をしました。台風で心配した水量も10日にはすっかり引き、透明で美しい姿に戻りました。冷たい水に初めはためらっていた子どもたちも、先生の話に引き寄せられ、川の生物について学んでいきます。水生昆虫や小魚を発見。捕まえた魚たちは本部で素揚げし、昼食時にありがたうおいしくいただきました。

もう一つ川で人気の授業は、カヌーです。まずは陸地で練習。オールを持ち、先生に教えてもらったとおりに八字に回します。練習ではばっちりだったのに、水に入ると最初の頃は思うように動かず、流されてしまいました。でも大丈夫。子どもたちの下流では本部監視ボランティアが、ずっと水の中で子どもたちの安全を守ります。

「土の授業」では、初めての生物に出会いました。歯がのこぎりのようになっていて磁石にひっつくオケラ。顕微鏡の中の微生物に、子どもたちの歓声が上がりました。

「緑の授業」では、自炊とハイキングのプログラムがありました。自炊では焼きそばにチャレンジ。火おこしから食材の準備、野菜を切り調理、配膳まで役割分担して進めていきます。で

## 地区の皆さんと歩んで来年は第6回

### 京都・美山「土と水と緑の自然学校」

新宮市での「土と水と緑の学校」と並んで、2013年から毎年3月に京都府南丹市美山町で開く「土と水と緑の自然学校」。10年に発足した「京大美山大内地区農村都市交流実行委員会」の活動がベースになっています。

この実行委員会は大内地区の住民が主体となり南丹市の助成を受け、JAFSも連携協力しています。十数年前から同地区で、ぞうすいの会などを催して皆さんと交流を深めてきました。

そんな中、住民の井上喜一さんと内久保公民館（元小学校）に行った際、約30畳のタタミの間を目にしました。さらに講堂、厨房、バスも停まれる駐車場、キャンプファイヤーができるグラウンドまであり、「土と水と緑の自然学校」ができるかと直感しました。

実現までには幾つもハードルがありました。地区の皆さんのご協力で行ったのですが、地区の皆さんに不安もありました。今年、第5回まで来られました。自然学校の目的は、ただ回を重ねることではなく、大内地区や美山町に都市部の皆さんが少しでも足を運ぶきっかけになる

こと、交流の輪が広がること。それが農村都市交流実行委員会の趣旨です。その点、今年開いた第5回は、学生ボランティアが中心となり、地元の方々の関わりを持っていただきました。新たな一歩となったように感じます。

大内地区長の渋谷さんのご協力で、来年の第6回は、さらに広範な地域で開校する運びとなりました。ますます活性化していきたいと思っています。

第1回当時の小学3年生が、もう中学3年生になります。今では、農村都市交流実行委員会の事業として、「大内米作りの会」の皆さんと5月に田植え、7月には野菜の収穫、9月には稲刈りが行われています。参加者の中には「将来、農業をしたい」と言ってくれた子もいます。それは、子どもたちの成長と同じように、私たちの農村都市交流も少しずつ成長しているという、かすかな望みでもあります。

「春3月は美山『土と水と緑の自然学校』」が、美山とJAFSの風物詩となりつつあります。木々がゆつくりと年輪を重ねるように、子どもたちや取巻く環境の成長を、ゆつくり見守っていける余裕を持ちたいものです。

(JAFSスタッフ 山竹継男)

きあがったら青空の下でわいわいいただきます。満点の星空の下、友だちと枕を並べテントで眠る夜は格別です。ハイキングでは、森の成り立ちを学びながら桑の木の滝まで行きました。滝の水量の多さにびっくり！マイナスイオンを浴び、森に抱かれた時間でした。

「海の授業」は、観察とホエールウォッチングです。太平洋の真つ青な海に潜ってみると、たくさんの種類の貝やうかが岩場に隠れています。ホエールウォッチングは船で沖に出ていきます。今回は残念ながらクジラは現れてくれませんでした。トビウオやシーラに出会うことができました。

変則的なプログラムになったにもかかわらず、頑張ってくれた参加者の皆さん。忙しいスケジュールの中、子どもたちの安全を守り、楽しませようとして懸命だったリーダーの皆さん。そして台風の影響でボランティア人数が

少なくなった中で、いつもの2倍以上の準備内容を寝る時間も惜しんで取り組んでくれた本部ボランティアメンバーの皆さん。心より御礼申し上げます。そして高田の自然を大切に守り、100人を超す大所帯を、いつも温かく迎え入れてくださる地元の方々に感謝申し上げます。

多くの方に支えられて続いてきた「土と水と緑の学校」は来年、35回目を迎えます。第25回時に埋めたタイムカプセルの掘り起こしも予定しています。10年前どのようなことを考え、10年後の未来に思いをはせていたのでしょうか？

8月はなにかとお忙しい時期だとは思いますが、来年の夏に多くのの方が「土と水と緑の学校」に帰ってきて、また、新たな方にも「土と水と緑の学校」を知っていただけることを、お待ちしております。

(JAFSスタッフ 岡本佳子)

今年1月20日から始まった第4次熊本地震被災者支援は、仮設5団地（小池島田、東無田、櫛島、安永東、惣領）の242世帯の人々と団地周辺で暮らしている人々が安全安心な日常生活に入れるお手伝いをする活動です。私たちの活動の出口を来年の3月31日と決め、震災以前よりもより良い地域生活が生まれ、私たち支援者と地域との良い関係が持続していくような形ができればと願っています。

## 記憶の風化防ぐツアー

「もうこれで終わり！」「気が抜けて立ち上がることもできなかった」あれから1年半が過ぎ、「未だに鮮明な記憶が頭から離れない」と語られる被災者たちとともに、暑い夏が過ぎ去りました。日常的に生まれては消えていく様々な問題、中には震災以前にも同じ事が起こっていたであろうことなど一緒に乗り越えながら、2度目の冬を迎えようとしています。

特に、震災時に壊れた家で1人が亡くなり、そのそばから梁の下敷きになられたご主人を助け出した東無田の人々にとって、自分たちの味わった過酷な経験を絶対に風化させてはならないという強い思いが感じられます。益城町を訪れる多くの人たちに対して、

## 仮設団地から地域復興へ



スタディツアーで震災の記憶を語り部が伝える＝7月18日、熊本県益城町

「自分たちがどんな経験をし、どのようかえ、この状況を乗り越えていくか」として、次の世代や他地域の人々に伝え残していくこと」がとても貴重に思います。今ではスタディツアーに毎月2～3のグループから申し込みがあり、防災を含めた地域のあり方を話し合う機会が持たれています。「たく

さんの方に来ていただき、多くの支援を頂いていることに感謝します」という声が聞こえてきます。特に注意を促されている、日本人が不得意としていく「受援力」をどのようにつけていくかという点に新鮮さを感じます。

## 民意の反映へ委員会も

全半壊した住居の撤去も終わり、家

を再建して、団地から出ていける世帯もちらほらと現れる頃です。「大空構想 Next Stage」というブランドデザインが発表され、県と市町村が密接に意見交換・連携し、このデザイン自体を深化させ、市町村の計画との整合を図りながら取り組みを進めようとしています。

行政主導で計画されていくインフラ整備や、断層線を回避したまちづくり、人々の暮らしに直接関係する復興住宅建設、これらのことに民意は反映されているのかといった疑問も聞かれます。

地域住民の気持ちや反映されて本来の多様な豊かな暮らしをどのように手に入れていくのかが問われています。東無田、櫛島では、「まちづくり委員会」が立ち上がっており、他の地域の人たちの意見も参考にしながら自分たちの街を自分たちの手でという機運が高まっています。

今は人々の心に寄り添い、多様な考え方や生活型に接し、多くのことを学びながら活動していく日々です。「私たちに何ができ、何ができないか」。できるだけ状況に慣れないように心がけながら、この地で暮らしていく人々の工夫が生かされた再生力とともに支援を続けていきたいと思っています。

(JAFSスタッフ 永井博記)

※この活動は一部、ジャパンプラットホームの支援で実施されています。

## 環境・医療・教育に貢献するソフトウェア開発



### ●ソフトキューブ株式会社

バーチャルリアリティ、3次元コンピュータグラフィックス (3DCG)、CAD (CAM/CAE など)、エンジニアリング分野のソフトウェアシステムの設計・開発を主軸とし、汎用のCADソフトを顧客が要望する機能にカスタマイズを行うなどのサービスを行っています。

野ではソフトウェアの製品化も行っております。ATHENA (人工膝、関節置換手術術前計画システム) は高齢により衰えた膝または関節をインプラントに置換する手術の支援システムです。現在全国40施設の病院に納入しており、収益面では決して高いとはいえませんが、医師が本ソフトを用いて手術し、高齢の方々が再び痛みのない生活を取り戻すことは、ソフトウェア開発で社会貢献を行うという当社の理念に通じており、やりがいをもって取り組んでいます。

大阪府守口市京阪本通2-3-5  
リパティール守口  
☎ 06-6991-6881  
代表取締役社長：北村雄吾

## 新・The 社会貢献

企業や労働組合、各種団体は、それぞれの理念に基づいて活動していますが、いろいろな形で社会の役に立ちたいという気持ちは私たちと同じです。アジア協会アジア友の会の理念にご賛同、ご協力くださっている法人会員を紹介します。

## 運送事業を通じて多くの人と共に助け合う



### ●堺南運輸商社株式会社

堺市西区で設立してから、今年で創業32年を迎えます。創業以来、大型ゲーム機の運搬業を中心に、関東営業所・九州営業所と全国的に事業を展開しております。

当社の徳田武志社長の経営理念は、多くの人と共に助け合っていくこと。「一人分の頑張りには微々たるものでも、それが何人も集まるとすごい

力になる」と語り、己には厳しく他人には優しくを貫き、「社員は宝」と公言し、社員が働きやすい環境を構築しております。

今や社員数80名を超え、トラックも70台を抱えるほどに成長いたしました。今後も長年信頼を培ってきた自動車運送事業を通じて、学校給食の配送、放置自転車等撤去搬送業務にも従事し、少しでも地域貢献につながればと尽くしてまいります。

大阪府堺市西区菱木2丁2107-1  
☎ 072-272-0581  
代表取締役：徳田武志

◆編集部注  
当会サイクルエイド事業の自転車搬送や緊急支援時の物資輸送でもご協力いただいています。

# 里子の笑顔

勉強したくても経済的な理由で学校に行けない、進学のを絶たれる。アジア協会ではそんなアジアの子どもたちを里親制度で支援しています。今回はバン格拉デシユの里子の生活をお伝えします。

## 「アジア里親の会」 里親募集

- 対象国はインド、カンボジア、ネパール、バン格拉デシユ、フィリピンです
- 会費は里子1人年額20,000円。複数も可です
- 里親には、里子の写真や成長記録をお届けします

## 宗教にすっかり根差した暮らし

バン格拉デシユはイスラム教の国と思う方も多いと思いますが、キリスト教徒やヒンズー教徒もいます。キリスト教徒の里子の日常を、手紙から紹介したいと思います。

「4月、イースターサンデーと呼ばれるキリスト教の大きな祭を祝いました。その日に向けて私たちは日々の行いを正し、宗教的雰囲気をつくりました。当日は親戚や友だちの家を訪ね、お祝いのあいさつを交わしました。



私はバン格拉デシユの伝統的な踊りが大好きで、時間がある時には踊りの練習をしています。もちろん母を助けて料理、掃除や洗濯などの家事もします。今は夏で暑すぎる気候です。時々破壊的な勢いの嵐と雷雨が降り、時には穀物や木々を破壊します。今の季節はマンゴー、ブラックベリー、ジャックフルーツ、スイカやライチなど色々な果物が採れます。また米の収穫期で、農家は収穫で忙しくしています。私は家の横に夏の野菜を植え、世話をしています」(4月26日の手紙)

「アジア里親の会」の里子たちは何らかの宗教を必ず信仰しています。信仰があつて暮らしが成り立つことを、里子の手紙から垣間見ることが出来ます。すてきだと思つるのは、子どもたちがどの宗教にも敬意を払つている姿勢。平和を学ばせてもらっています。

(JAFSスタッフ 熱田典子)

## 環境コラム

1979年の高知での公式確認が最後で、2012年に絶滅が宣言されたニホンカワウソ。8月半ば、長崎県対馬で見つとるニホニアカワウソが流れ着いた可能性もあり、ニホンカワウソの生き残りかどうか未確定だそうです。他に日本で絶滅した動物として有名なのはニホンオオカミ。絶滅が危ふまれている絶滅危惧種としてはメダカやニホンウナギ、タンチョウヅルやイリオモテヤマネコ、キキョウなど、陸上では動物1372種と植物2262種の計3634種(環境省レッドリスト)もいます。人間による環境破壊や乱獲が原因であり、よく知られた生き物も含まれています。全ての生き物は同等に大切な存在ですが、知っている身近な生き物が絶滅する!となると、環境を護ろうという意識もいっそう高まりますね。

## 絶滅危惧の生き物

前はアジア広域に10万頭いましたが、森林伐採で生息地の9割以上が失われ、毛皮やはく製、漢方薬などのため密猟が続き、現在約4000頭まで減少。バリトラ、ジャワトラは既に絶滅。ベンガルトラ(インド、バン格拉デシユ、ネパールなど)、スマトラトラ(インドネシア)、インドシナトラ(タイ、ミャンマーなど)、マレートラ(マレーシア)などが絶滅に瀕しています。強いトラですが、食物連鎖の頂点に近い生物ほど環境変化の影響を受けやすく、絶滅した場合に周囲に与える影響も大きいものです。環境を護らないと、そのうち人間も絶滅危惧種になりますね。

(JAFSスタッフ 川本裕子)

こんな観点で、アジアで絶滅の危機に瀕している生き物を、今回は動物3種類ほどですがご紹介してみます。

◆サイ 地球上の5種類は全て絶滅危惧種です。アフリカにシロサイとクロサイ、アジアにインドサイ3000頭(インド、ネパール)、スマトラサイ1000頭(インドネシア)、ジャワサイ50頭

# アジアの女性が

## アジア・ユースサミット コーディネーターから感想

第5回アジア・ユースサミットでは、参加者のほかにコーディネーター18人も来日しました。高校生の可能性を引き出すとともに、帰国後の実行と活動継続をサポートする役割を担います。コーディネーターからの感想です。

各国の問題を議論して国々の方向性が見えた。



その上で私たちの課題を理解してもらって励みになった。

(インドネシア/ベラハズメリア)



SDGsガイドラインという世界目標に私たちの活動を照らし合ってきた。事前勉強の機会があった。

あればもっと理解が進んだのに残念。(バン格拉デシユ/サジッドイフテカルチョウドリー)



前回参加者だった。自分たちの活動を続けるのが重要と改めて感じた。次はもっとリーダーシップを發揮できるように、自国で努力します。(ネパール/アニスタンド)

## 国々の方向見え、励みに/次はリーダーシップを

参加者のほかにコーディネーター18人も来日しました。高校生の可能性を引き出すとともに、帰国後の実行と活動継続をサポートする役割を担います。コーディネーターからの感想です。

ウカール) 高校生の言葉が通じ合わない場合があるが、若者が志一つにともに過ごし、各地域のリーダーを育てる。自分たちの活動やネットワークを考えるいい機会です。(インド/カシナートデオガダ)

インドの参加者から発展の勢いと若者パワーで前を向いて走っていることを感じ、アンコールワットがあるカンボジアは立ち居振る舞いから、上品で落ち着いた美しさを感じました。インドネシアのアチエは豊かな自然の生活の中、日本と違う豊かさを持っていました。

このコーディネーターたちが、同じ目標に向かって進んでいく一生の友となり、今後のアジア社会を担って切磋琢磨する仲間となっていくでしょう。AFSのニューリーダーたちの活躍が楽しみです。

(JAFSスタッフ 熱田典子)

## 鍵盤ハーモニカ寄贈お願い

インドの日印友好学園コスモニケタンの先生方が、鍵盤ハーモニカをぜひ生徒たちに教えたいと希望されています。日本では小学校1・2年生でのみ使われるこの楽器が家で眠っている方、ご寄贈をぜひお願いいたします。JAFS大本宛てにお送りください。

## 入会のご案内

皆さまが会員となつてサポートして下さることで、安定した活動計画ができます。継続した活動をしていくためにも、ご協力をお願いいたします。

- |                   |      |                            |
|-------------------|------|----------------------------|
| A. 維持会費           | 年額1口 | 12,000円<br>(月額1,000円)      |
| B. 賛助会費           | 年額1口 | 6,000円<br>(月額600円=振込手数料含む) |
| C. ジュニア会費 (高校生まで) | 年額1口 | 1,000円                     |
| D. 団体会費           | 年額1口 | 20,000円                    |
| E. 法人賛助会費         | 年額1口 | 50,000円                    |
- 会費・寄付の振り込み先  
郵便振込  
00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

## 編集後記

フィリピン・パンダンの簡易水道を見学したのが12年前。安全な水を手にした住民たちの笑顔が忘れられません。今号から編集をお手伝いします。(督)

と にかく暑かった!猛暑が当たり前になった今、見るだけでうんざりする毎夜の「今年一番の暑さ」のニュースはそろそろやめてもいいのでは?(和)

も う秋。アジアネットは年4回、季節を感じます。皆さん、アジアの恵まれない子どもたちのために一緒に頑張りませんか。あなたの少しの力を下さい。(金)

夏の活動は盛りだくさんでした。多くの皆様の協働で順調に推移していきました。様々な成果をお伝えいたします。皆様、お疲れがたまえぬように!(博)

一年はあつという間。年齢を重ねるごとに、年月の経過がスピードアップしますね。本誌アジアネットも、この秋号の次は年明け発行の冬号です!(川)

## 環境

環境に優しい商品を使う、健康志向の食生活をする等、自分らしいスタイルで生活する人が増えてきた。マイブームで終わることなく継続指向に。(眞)

7月、伊吹山に登り、ユウスゲの花に出会いました。別名「忘れ草」。この花を胸に抱くと、愁いを忘れろか。気持ちがいだら、ぜひ伊吹山へ(敏)



募金にご協力をお願いします

アジアの安全な飲料水がない地域で  
貧困に苦しむ人々を支援する活動に使われます

郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会



▲ジャックフルーツ（パラミツ）の木に登り、実を木なりのまま皮をむいて手づかみで食べる子ども＝8月、スリランカ

◀表紙の写真「地域を良くするプロジェクトを創ろう!!～経済、環境、文化がいきるまちづくりをめざして」をテーマに開かれた第5回アジア・ユースサミットで、グループディスカッションをする参加者たち＝8月19日、奈良市青少年野外活動センター。4～9頁に特集記事

編集・発行：公益社団法人 アジア協会アジア友の会

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5階

☎ 06-6444-0587 FAX 06-6444-0581

URL：http://jafs.or.jp E-mail：asia@jafs.or.jp

2017年10月 131号 発行人：萩尾千里 編集人：村上公彦

広報企画委員長：法花敏郎

編集アドバイザー：黒沢雅善、松本 督

編集スタッフ：佐藤眞子、永井博記、岩崎準一、大本和子  
金井英夫、川本裕子、安田剛大

編集協力：E C C 国際外語専門学校/ECC Translation Club

印刷製本：あさひ高速印刷株式会社